



『レポート・卒論の  
テーマの決め方』

三井宏隆 著

慶應義塾大学出版会  
二〇〇四年五月  
本体一、五〇〇円  
四六判、一三六頁



本書は大学教育の要諦であるレポート・卒業論文(卒論)を取りあげ、主として、そのテーマの決め方、まとめ方に焦点をあてて論じたものである。

タイトルを見ての大方の印象は、「レポートや卒論にテーマがあるのは当たり前。そうしたテーマについて書かれたものがレポートであり、卒論であろう」といったところであろうが、必ずしもそのように進行しないことが問題である。

仮にテーマが与えられていたにしても、それをどのように料理し、形あるものに仕上げていくかという段になると、アカデミック・スキル (academic skill) が必要とされるのである。その意味では、レポート・卒論であっても、学術論文と同様の扱いであり、それ相応の学問的体裁が求められるのである。

こうしたアカデミック・スキルは、日頃の学習を通じて習得されるものであろうが、大学教育の実状は、そうした前提を危ういものに行っているのである。

本書で取りあげたトピックスもまた、一昔前であれば、「何もそこまで言及する必要はない」と思われることばかりである

が、「知らなかった」では済まされないので、学問の世界である。たとえ学生といった身分であるにせよ、そこに身を置く者としては、当然のことながら承知していなければならぬ約束事というものがある。

本書が求められたのも、こうした事情があつてのことであろう。

執筆にあたっては、大学生一般を読者に想定した関係で、必ずしも通信教育課程に学ぶ人たちの実情に即した内容とならなかつた憾みがある。ゼミナール(もしくは研究会)における卒論指導、そこでの先輩や同級生たちとの情報交換、必要に応じての教師の助言等々は、むしろ通学生に身近な話題であろう。

しかしながら、私自身の卒論指導の経験からしても、卒論テーマの重み、卒論への取り組み方といったことに関しては、通信教育課程に学ぶ人たちに一日の長がある。

「学問に王道なし」と言われるが、彼らのそうした真摯な思いが学問上の成果として結実するにあたり、本書がその一助となれば幸いである。

(みつい ひろたか 文学部教授 社会心理学)

激震・弱震

読んだら書くのか？  
書いたら読むのだ！

一九五二年、亡命作家ウラジミール・ナボコフにハーバード大学で文学講義を担当させることになったとき、言語学者ローマン・ヤコブソンが苦言を呈した。「次は象に動物学を教えてもらうかね」文学研究の専門性は作家ごときに譲れない領域とされたのだ。

それから半世紀、全米で三五〇以上の大学が創作専攻を設置している。修士課程は優に百を超え、二十数校が博士課程を擁している。英文科内に文学・言語学などと併設されることが多い創作科課程の独自性は、詩や小説といった創作作品を学位論文とすること、ゼミに代わってワークショップが教育の中心にあることだ。

アメリカで創作科は世間に広く認められ



るようになった。作家・詩人が大学教員となることで、大学を「象牙の塔」から文化的に親しみやすい場所へ変貌させたことは、反インテリの伝統の強いアメリカでは意欲深いことでもある。だが、作家養成機関として見ると、創作科はなおうさんくさい場所とされているような気がする。

というのも、現在何千もの詩人・作家が講師や教授の役を全米の大学でつとめているわけだが、もちろん作家として生計が成り立つものは一握りなので、もしかすると大学の創作科とは、作家を養成するのではなく、作家を養うシステムではないかという疑問が生ずるのだ。小説読みより小説家志望者の方が多いかに見える今日このごろ、創作の授業はどこも大盛況。アイオワ大学の創作科は倍率からすると、ハーバード

法科大学院より入るのが難しいなどと言われている。大学にとつては格好の収入源、食えない作家にはありがたい職場である。

と、皮肉なことばかりも言っているらしい。創作科のすばらしさをアピールしなくては。そこでいきなり結論だが、創作科は、実は読者養成の場として文学に大きく貢献しているのだ。考えてもみてほしい。

卒業生のうち「作家」になるのはどれだけで、よりよい「読者」になるのはどれだけか。彼らが文学にとつていかに大切な支えであるか。どんなに作家歴の長い大小説家でも、執筆歴が読書歴を上回ることはない。創作の実習は、特に初心者にとつては、いかによく書くことが困難であるかを体験する機会であり、他人の文章のうまみを細部までありがたく味わう心がけを身につけるきっかけとなる。読むことは、よく書くための前提だが、書くことによつても、私たちはよりよく読むべきを学んでいく。

吉田恭子(文学部助手 創作・アメリカ文学)